

【会員寄稿】

## 山田先生との思い出

### レ専校と42回生

大阪医科大学附属病院 漢那 憲聖(42回生)

レ専校(レントゲン技術専修学校)を語るのに滝内政次郎校長先生、木村幾生先生、山田勝彦先生の高レベルな教育の他、人生観・飲酒作法等、立派な社会人としての教養および人格形成のご指導が存在した事を抜きにしては語れません。

特に山田勝彦先生には我々42回生は色々ご迷惑をお掛けした卒業生だと思います。42回生は卒業後、同窓会を持たない「42回」と陰口をたたかれていた様ですが1度だけ同窓会を開催致しました。(開催年不詳)

その時、山田勝彦先生主役の事件が発生しました。

関西電力病院へ入職した大塚徳行君の尽力で京都東山にある関西電力関連の施設を利用して頂き盛大に同窓会を開催致しました。(此处までは一般的な同窓会の報告です)宴は京都情緒豊かな場所で京料理と美味しい酒に酔い全員、真っ赤な顔でお互いの近況報告や仕事の情報交換等の歓談で大いに盛り上がり「次も同窓会をやろう」と意気込みを表し絶好調の宴でしたが「これにて中締めとします」の幹事の無常な一言に誰一人、文句を言う参加者も無く優しい42回生は再会を約束し宴会場を後に散会いたしました。

宴の余韻の残る山田勝彦先生と7~8名、会話しながら河原町駅目指し歩いていましたところ突然、脱兎の如く山田勝彦先生が走り出し消防署にエンジンを切って出動待機中の大型消防車の運転席へ乗り込みハンドルに手を掛け、まるで小学生のような屈託の無い笑顔で愛嬌を振りまく姿に一同唾然としたのも束の間、全員冷や汗タラリ。異常事態を察知した消防署員数名が血相を変え「止めなさい」「早く降りなさい」と口々に叫びながら駆けつけた処で山田勝彦先生は抵抗することなく運転席より静かに降車。「すみません！宴会の後で本人、酔っていますので申し訳ありません」と平身低頭で謝りますとお咎めも無く笑顔で「気を付けて下さい」と許して頂きました。消防署を後にして再び歩き始めた山田勝彦先生曰く「一度、消防自動車に乗ってみたかったんや！ワッハッハッハッハッ」。

古き良き時代、初夏の記憶に残る一夜の出来事でした。

次ページへ続く

## 九州出身同期生と山田先生との思い出

大田 豊(44回生)

京都医療科学大学学友だよりの通巻 187 号の案内で、卒業後も懇意にさせていただいている 43 回生諸先輩方の定年・退職にあたる【思い出話】に目を通しながら、在学中の古き良き時代を懐かしく想っていた間際、紙面の【ご案内】欄に山田勝彦先生退任記念講演・祝賀会開催案内が目に入り、山田先生への非常に懐かしい思い出と同時に、感謝と謝意の念が錯綜するなか、当時我々学生への教育に山田先生が苦慮された面で、エピソードに類する思い出が浮かびます。

所以あって私は、沖縄在の先輩の奨めで昭和 42 年 4 月に当時のレントゲン技術専修学校へ入学させていただくこととなりました。しばらく経つと当時、九州出身の学生数が圧倒していた記憶があり、遠い故郷への寂しさを拭い、学生らしさの誇示が必要とのことで長崎出身の小川氏がまとめ役になり、学生寮を中心に「呼称：九州連合」なるものが創られました。粗雑ではありましたが、同郷の先輩、後輩達のコミュニケーションを図る場として貴重な会になりました。当時の社会環境のなかで摂理に疎い学生連中のお目付役として山田先生にご無理をいい、学外での学生の指導・指南役までお願いするに至りました。(学校側の規律に沿った苦勞な役割とも知らない我々でした)

昭和 44 年 4 月、学校は診療エックス線技師法の改正により、3 年制診療放射線技師の養成となり、我々が初の 3 年制入学として認められましたが、暫定措置となる診療エックス線技師資格の取得で養成 2 年での帰省にやむを得ない心境の学生もいました。学生達の葛藤に山田先生をはじめ、学校関係の皆様からの方針説明を受けたことも懐かしい記憶として残ります。

「九州連合」と言っても単なる飲み会とドンチャン騒ぎの場が多く、日頃の活力とうっぴん晴らしのコミュニケーションで、山田先生には我々学生の面倒に大変苦勞されたと思います。さらに群をなして山科の先生宅までも上がり込んで行った始末で、ご家族にも大変ご迷惑をかけたことが記憶に残ります。そして洛中の先輩方にも山田先生の下でお世話になりました。当時、学生が社会的配慮に未熟だった事にも寛容な姿勢で育みいただき、文面での懐かしさと感謝の気持ちをお許ください。(先生宅での失態は数多く、隣にまで迷惑をかけましたが武勇伝ではありません)

教育者としての山田先生には特有の資質を持たれており、羽目を外した我々の乱行にも自然に自覚を促す姿勢に数多くの学生達が感銘を受けております。反面、包容力の大きさを別の意味に勘違いし、再三面倒をお掛けすることも時にはあり、私を含め同窓の進退にも奔走下さったことも苦い記憶に残ります。永年、学生の社会環境の立場について学生の要点をまとめながらも自然に何気ない配慮で、学生をご指導いただいたお陰で九州出身の学生達も先生の指導・教育で学舎を巣立つことが出来ました。そして学校創設者の島津源藏氏の教育理念である「品性を陶冶し有為の技術者を養成するをもって目的とす」の理念が山田先生に導かれ今でも非常に良い教訓として残っております。

次ページへ続く

## 先見の明

神戸大学医学部附属病院 川光 秀昭(54 回生)

私が(園部ではなく)京都市内にあった専門学校に在学していた昭和 50 年代前半(1980 年)当時は、マルチスライスCTで 320 枚の画像が1秒以内で得られる現在とは比べようもなく、全身用のCTが出回り始めた頃で、最先端の技術を持ってしても、20 秒程度の息止めで、やっとお腹のCTが一枚だけ(EMI1010 はマルチスライスでしたが)撮影できる程度でした。勿論、臨床の現場ではMRI(当初はNMRと言っていました)なんて知る人もいなかったでしょう(少なくとも私は知りませんでした)。

その頃、学生の私は核医学に興味を持っており、夏休みなどには京大病院の藤田先生(学友会理事、前技術学会会長)のところにも用もなく通って(用もなく通う=遊びに行く)いました。核種の同定の実験のお手伝いしていた時(内容はすっかり忘れましたが)、“常磁性共鳴吸収”の話題(おそらく ESR, MRS か?)が持ち上がり、(ホントに)突然にやってみようかと言うことになりました。論文を頼りにした実験で、器材の調整が上手くいかず結局は失敗したのですが、分光法としてはX線回析しか知らなかったのので、この方法にはとても衝撃を受けました。何かの機会に(山田先生は学生と“お酒”を飲むのが好きだった)、このお話を山田先生にしたところ、この原理を使ってCTの様な断面の画像が再構成され、とても有用で将来はCTを凌ぐかもしれないと教えていただきました。その当時、CTの有用性さえ理解できていない私には、全く理解できないお話でしたが、深く印象に残った技術を先生も認めておられるということで、忘れられない出来事となりました。

卒業して島根医科大学に赴任して 10 年目が過ぎた頃、NMRなる放射線を使用しない、被曝のない、未知の検査装置が病院に設置されることになりました。私が担当することになり、フタを明けてみると、遠い昔に試みた、また山田先生に教えていただいた“常磁性共鳴吸収”だったのです。

MR検査がその後の医療界に果たした役割は、もう既に皆さんもご存じの通りです。“Mr(ミスター)画像診断”と呼ばれるほど、無くてはならない検査となりました。山田先生のご専攻は、放射線測定や管理であったと記憶していますが、画像診断を専門にしている先生の中でも、この現在の状態を 30 年前から予測できた方がどれほどおられたでしょうか。

私は、この時の山田先生の年齢を超えてしまいました。職場の中ではそれなりのポジションにいますので、30 年後とは行かなくても、5年後、10 年後を見据えた運営をしなければならないと考えていますが、1年先のことも覚束きません。

今でも、MR装置の前に座ると、山田先生が「どうだ、言う通りになっただろ」と仰っているようです。日頃、精進(勉強)して、こぼれ落ちたのが教養(先見の明)ではないかと思えます。退職する頃には、何か一つくらいはこぼれ落ちた教養に華を咲かせたいと、山田先生に一步でも近づきたいと、日々、精進を心がけている今日この頃です。

次ページへ続く

## 我が恩師

住友病院 西田 俊彦(58 回生)

私達の恩師である山田先生が、母校を退任されることがついに現実になってしまいました。大きなボルトが外れてしまった感じがするのは、きっと私だけではないでしょう。

山田先生が技師教育を始められた昭和 33 年と私の誕生年が同じであることから、何か縁がある様にも感じていた自分も、気がつけば二十余年の病院勤務生活を送っています。

さて、山田先生の講義で何故か今でも記憶に残っているのは『空間電荷補償回路』の動作説明です。今は放射線機器工学という範疇に入っていますが、当時は設備と呼んでいたように記憶しています。黒板に回路図を描かれ理論整然と話される内容に、当時は納得も得心もしました。今となっては忘却の彼方ですが…。私の記憶はこのように小さなものですが、先生の場合はスケールが違います。

今から数年前、先生とお会いする機会があったときに『先生も教鞭をとられて 50 年近くなられますね。一学年 50 人として延べ 2500 人近い卒業生を世に送り出されたんですね。』との問いに、『短大の学生さんたちは少し自信が無いけれど、専門学校時代の方についてはほとんど覚えているなあ。』と笑って応えておられました。恐るべき記憶力！！それは、今のデジタル放送と同様、公私ともに貴重な情報が双方向の関係で保たれていたのが最大の理由だと思います。だからこそ、講義が終われば先輩・後輩の関係、『ええもんがあるで！』と言っては決して高価ではなかった(失礼しました)けれど、美味しいお酒をいただき、意見交換出来たのは、私たちの年代だけではなかったことからも分かります。自転車での飲酒運転で京都駅まで何度帰ったことか、今となってはいい思い出です。学生たちはある年限でところてん方式に学校を後にしますが、先生方は毎年元気な学生が入学し、肝臓の休まる間もなかったのではないのでしょうか。先生の教員生活のご成長とともに、母校の四年制大学化という積年の努力が実を結びました。その裏側にはどのような艱難辛苦があったことでしょう。

最後に、これまでの長年にわたるご功勞に対し敬服申し上げますとともに、どうか健康に留意され、お元気でお過ごしてください。また全国の学友会支部総会にも、体調とお時間の許す限り必ずやお顔を見せてください。お世話になりました。そしてありがとうございました。

次ページへ続く

## 山田勝彦先生の退任によせて

近江八幡市立総合医療センター 小島 由美子(62 回生)

先生と初めてお話をさせていただいたのは「新入生歓迎コンパ」の席だったと記憶しております。50 人余りの新入生の中で女子の人数が 7 名という、過去最高の女子数だったのが私たち 62 回生です。まだ京都市内に校舎があった最後の年です。かなり古くなっていた学校の 3 階で学生も先生もベロンベロンになるまでビールや酒を飲み、大いに語りあっておられる中心に先生はいらっしやいました。近寄りたがたい雰囲気醸し出していた講義中の先生と違い、なんと大きな声で笑っておられることか……！！ここは愛想よくご挨拶とばかりに、女子ばかりでおしゃべりにおしかけました。第一声は「女子は就職大変やでなあ、あーっははは…まあがんばりや」でした。かなりのお酒の量も、豪快な笑い声もどの人よりも大きかったと思います。(この後 3 年間の学生生活、この先生の指導でほんと大丈夫かいなあ、ちょっと思ったりもしました。)でもお酒が入ったときだけです、先生が学生に厳しくないのは、放射線計測の授業は抜けて帰るなんて絶対できません。試験問題も難しく、辛い採点で赤点取る人が一番多い科目でした。でもあの時勉強したこと、放射線の単位はもちろん、計測器なんてもうほとんど実際の仕事では扱うことが少ないのにもかかわらずまだ忘れていません。先生に放射線の基本を教えていただき、本当に良かったと感謝しております。

なんとか先生のおかげで無事就職し、「後から続く女子のためにも 3 年は仕事を辞めないように」とおっしゃられたとおり、私は辞めずに 20 年同じところで技師をしてしまいました。卒業してからも何かとお世話になり、また施設や地域が違っても先輩方に出会うと先生の話で盛り上がります。時代、時代に先生の武勇伝があり、「そんなこともあったんですか」とこの場でかけない話、たくさんあります。

「先生が退任される日がとうとう来たんだなあ」というのが今の私の感慨深い気持ちです。私たち教え子も学校も本当に先生にお世話になりました。ゆっくりと第 2 の人生を楽しんでいただきたいと言いたいところですが、今後もどんどん時間の許す限り学友会などで私たちと出会って下さい。本当にお世話になりありがとうございました。

以上